

わたしには3人の子供がいる。長女と長男と次男である。

長女は民子と命名した。「民さんは野菊のような人だね」。

伊藤左千夫の「野菊の墓」の民子である。40を過ぎてはまだ独身で、わたしから結婚をせかされるのを嫌がり、あまり我が家にも寄り付かない。いろいろな理由で、独身の女性が多くなっている週刊誌で読んだ記憶がある。民子は世田谷の笹塚で生

まれた。毎日、民子を見に頻繁に病院に通うわたしを看護師さんが笑っていた。

長男の大吾は鹿児島を知覧で

生まれた。わたしが劇団青俳で作・演出「牙よ ただ一撃の非情を生きよ」の稽古をしている時であり、知覧には帰れな

長男は知覧生まれ

いであつた。ぬいぐるみの児童劇の裏方をやっていた。仲間には柄本明や本田博太郎がいた。

したものである。父は、なにも語らなかつたが語らなかつたからこそ、望郷の念の強さを知つた。

わたしは「帰りゃんせ」という歌が好きである。「おうちがだんだん遠くなる 今来たこの道帰りゃんせ」。父は「叱られ

隠岐の島の、代々の岡部の墓の写真は我が家の仏壇に飾つてある。家内は「知覧からタクシ

の声がした。「オカべばつぶしくてくいやい」。驚いた。わたしは殺されるのか。鹿児島では豆腐をオカベという。なんでも、岡部という侍が鹿児島に豆腐をもたらしらしい。白い「お壁」の意味ともいわれる。それから20年が過ぎた。義母の家は「今年の梅雨で壊れる」といわれるまでに荒れていた。座敷まで靴のまま上がる状態であつた。すでに義母は施設に入院をしていた。再生しようと決めた。大吾が生まれた土地であるし、わたしも好きな知覧であつた。特攻観音や武家屋敷はまだ有名ではなかつたが、知覧の川に流れる鯉の群れや清潔な町並みが好きであつた。

つた。家内の実家は知覧から峠をひとつ越えた里である。いまは亡き義母が民子の手を引いて、峠を越えて病院へ通つたそうである。すでに義母は連れ合いをくくしていた。初めて家

「と」という歌をよく口ずさんでいた。「叱られて叱られて あの子は町までお使いに」。よっぽどの思い出のある歌だつたの

クシヨンを鳴らせ」といった。いわれた通りにすると、綿入れを羽織つた家内がちょうちんをかざして駆け付けた。鹿児島で酒といえば焼酎である。その夜は辛焼酎白波をあおつて寝た。まだ白波しかなかつた。

朝、台所の方から義母と家内